



され、本村を凌ぐ規模になっていた。

下流の四戸は間山谷を挟んだ兩岸に位置し、左岸に二戸・右岸に二戸で眼下に土を望む場所にあった。右岸の二戸は土第一発電所の水槽の上と、水槽下の緩い斜面に建てられていた。

家数・人口推移は、

『飛騨国中案内（一七四六）』 一八戸

『斐太後風土記（一八七三）』 二二戸 一一七人

『神岡町史（一九六〇）』 三六戸 一五二人

とあり、かつては居場所がなくて集落外へ出ざるを得なかった次男・三男が跡津発電所の操業に雇用され大いに発展した。

土から跡津川を経て有峰へ至る有峰街道（旧跡津川街道）は、跡津川の兩岸沿いに二本の道があった。一本は国道四一号線の土の入り口から現市道の対岸の跡津川左岸沿いを経て土集落内を通り、土第一発電所前の通称“犬帰り”を通って跡津川の右岸沿いに日面に向かう道であり、もう一本は隣村の牧村から山中を通り間山谷左岸の小沢宅・洞口宅前を経て間山谷を横断し、下間山宅・土第一発電所の水槽および間山宅前を通って現在の導水路に沿う形で跡津川左岸を上流に向かい、さらに福島宅・大西宅を経た後、万代橋で跡津川を横断、日面地区に入り大倉宅の下から現市道に上る道である。大倉宅前で二本が合流し、大江宅前を通り佐古へと続いていた。

また大江宅前は江戸時代、鉛の採掘で大いに栄えた長棟

鉛山に至る「長棟道」への要所でもあり、下方家の上方には跡津川口留番所があった。

その外、『飛騨国中案内』には、大雪の時に神岡の鹿間から雪崩を避けて安全に茂住まで行くルートとして、鹿間村↓笈破村↓跡津川村（下間山）↓池の山↓茂住銀山町という街道のことが記されている。

## (二) 生活の基盤

ア衣

『斐太後風土記』に記載された村の産物のうち跡津三村の麻の生産量は、跡津川Ⅱ二五貫、大多和Ⅱ七貫、佐古Ⅱ空欄（ゼロ？）で三村のうち最も多い。また、西漆山から「谷」までの北部一二集落中西漆山の二六貫に次ぐ生産量であるが、麻苧あはという糸にして売買したようで麻布にしたり、衣服を作ったりすることはほとんどなかったと思われる。

「婆ちゃんはよく麻苧を紡いでいた。昔は麻の布を織ったのでしようが、子どものころは見たことが無かった。婆ちゃんはその麻苧は何に使ったのか全然分からない。爺ちゃんが「麻着」と言つて「みじか」を着ていた。昔織った麻布で作ったのだと思う」（回想記）

イ食

『飛騨国中案内』によると、石高は一四石六斗八升三合

であるがほとんどがアワ・ヒエ・キビで、米は一石三斗五升二合と、わずか一割程度である。

◇「米を作っていたのは七〇八軒で、少ない田は跡津川の両側にあり、昭和三七年ころはまだ作っていた。また、佐古との境の『木地屋田んぼ』でも四軒くらいが米を作っていた。」（回想記）

◇跡津川は米が無かった。トチ・アワ・ヒエだったが、私わがが子どもの時は作馬が稼いで来た米を食べていた。

（大西広和さん）

(ア) 耕地

日面地区の水田は跡津川の河原付近に少しは作られていたが、全戸が水田を持つていたのではなく、収量もわずかであった。ある程度まとまった収量があったのは『木地屋田んぼ』だったと思われる。

『木地屋田んぼ』

は、跡津川日面地区の佐古との境界付近の山地に拓かれた水田である。木地師が住み着いた木地屋と



木地屋田んぼ（昭和52年）